

みなさんの夢や願いごとは何ですか。私の夢は、子供が好きだから保育士になりたい。ピアノをもっと練習して、どんな曲でも弾けるようになりたい。英語が話せるようになりたい。そして、家族みんなが健康で暮らしていただけることです。

でも、宗太郎さんの願いは、私たちの願いとは違いました。生きたい、生きてごはんが食べたい、友達と遊びたい、走りたい、歩きたいなど、通常の子供ならできて当たり前前なのが宗太郎くんにとっては大きな願いだったのです。

宗太郎くんは、生後まもなく、消化器すべてが正常に機能しないヒルシュスプルング病類縁疾患と診断されました。それから八年間、宗太郎くんとお母さんはずっと病氣と闘い続けてきました。お母さんは、宗太郎くんの願いをひとつでもかなえさせてやりたいと、海外での移植手術を決意しました。あまり例のない多臓器移植の手術には成功しましたが、合併症によって宗太郎くんは九歳で亡くなってしまいました。

お母さんは、宗太郎くんに手術の話をするとき「移植」という言葉を使ったことがありませんでした。脳死について、どう説明したらよいか、迷いと不安があったからです。

私は、移植について調べてみました。人の生命は、心臓、肺、肝臓、腎臓など、さまざまな臓器の働きによって維持されています。臓器移植には、脳死、または、心停止した人から提供された臓器を移植するものと、健康な人の臓器の一部を移植するものがあることがわかりました。以前は、十五歳未満の子供の脳死後の提供については、日本では法的に不可能だったため、移植が必要な子供は、日本国外へ行かざるを得なかったのです。現在では、臓器移植法の改正が行われ、家族の同意が得られれば認められるようになったため、日本国内でも十五歳未満のドナーの臓器移植が可能になりました。もっと早くに移植法の改正が行われていれば、宗太郎くんも遠い海外へ行かなくても、日本で手術が受けることができたかもしれないと思いました。しかし、日本では、脳死後の移植が欧米諸国に比べて少なく、また、移植を希望する人の数に比べて、実際に移植が行われる人の数が、まだ少ないのが現状で、移植が必要とされながら、移植を受けることができずに亡くなる人が大勢いるというのを聞くと、宗太郎くんは、できる限りの医療を受けることができたことは、お母さんも後悔はなかったことと思います。

改めて移植のことについて考えてみると、もし自分の家族が脳死状態になった時、果たして臓器提供に同意できるか悩みます。臓器提供により他の人を助けてあげたいという気持ちと、家族をきれいな姿のまままで最期を迎えさせてあげたいという複雑な気持ちです。でも宗太郎くんのお母さんは、宗太郎くんが亡くなった後、今後の医療に少しでも役に立てたらと、解剖を希望しました。私は、どこまでこのお母さんは強い人なんだろうと思いました。

移植手術が行われる前、お母さんは宗太郎くんに「FREE OF LIFE(命の樹)」の前で「移植」の意味を説明しました。命の樹と名づけられた樹木の葉っぱの一枚一枚には、今までドナーになった人の名前が刻ま

れていました。まだ名前のない葉っぱに、いずれ宗太郎くんのドナーになってくれた子の名前が刻まれる日が来るかと思うと、お母さんは心が引きしまる気持ちだったと思います。

私は、この本を読んで「生きる」ということを考えさせられました。今、日本において自殺は主要な死因の一つであり、また自殺率は諸外国と比べてとても大きい割合で、アメリカの二倍にも相当すると言われています。自殺の理由は、学校でのいじめや仕事の問題、家庭環境などいろいろあると思いますが、この宗太郎くんのように生きたくても命を落としてしまう人のことを考えると胸が痛みます。私も、今まで生きてきた中で何度か死にたいと思ったことがあります。でも、それは本当に死にたいという訳ではなく、ただその場所から逃げ出したいだけだったと思います。宗太郎くんのように病氣と正面から向き合い、闘う姿を見て、逃げ出したいと思った自分が恥ずかしくなりました。これから先、苦しいことや悲しいことがあった時、宗太郎くんのように正面から立ち向かう自分でありたいと思います。そして宗太郎くんが身をもって教えてくれた「生きる命の輝き、尊さ、そして、その命の陰にはたくさんのお母さんがいること」をいつも頭におき、これから生きていきたいと思います。

高校生・一般の部  
川根高等学校1年 山下摩耶  
今を生きよう  
「#FREE OF LIFE」

「私は何のために生きているのだろう。自分という人間がみにくくて、悔しい。」親

の穴をほじくっていたら喜びが出てきた。』という意味が分かる気がします。苦しいからこそ分かる幸せ、辛いからこそ分かる喜びがあるということを学びました。つまり、この世に「不幸」などということはないのではないかと思います。だから、苦しくても私は今、すごく幸せです。星野さんの言うように、平らな道では鳴らなくて、でこぼこ道では鳴る、みんなが心の奥にもっている鈴を私も見つけられたらいいと思います。

また、星野さんは、「人間は立派に生きる」とも、この世に生を受けて生き続ける、それを神さまに感謝して生きることが非常に大事なことなんだ。」と生きて生活しているそうです。私もこの言葉に感激しました。空に浮かぶ雲のように、今という時間は二度と訪れないし、生きているというのは神様が必要として下さっているからであって、決して無意味に生かされている訳ではないのだと思うからです。

だから私も、星野さんのように一日一日を大切に悔いのないように生きていきたいと思えます。二度と訪れない特別な時間を無駄にしまつてはもったいないと思うし、誰でも明日の命は分からないのですから、星野さんのように、一日一日、一秒一秒を大切に、周りに流されず、自分の志を持って人生を歩んでいきたいです。

から怒られたとき、自分の向かう方向が分からなくなつたとき、いつもそう思っていました。そう思う度、悔しさと恥ずかしさで涙が止まりませんでした。「誰も自分のことを理解してくれない。」という思いから、いつも心の居場所がないようで、何をやっても全て空回りで、なにかもが嫌になつたこともありました。そんな時、私を支えてくれたのは音楽と故郷の大自然でした。私は幼い頃から音楽が大好きで、とくに歌うこと、演奏することが好きです。今でも吹奏楽部に所属していて、私から音楽をとつたら何も残らないくらい大好きです。何度、歌に励まされてきたか分かりませんが、この音楽以上に私の心の支えとなつたのは故郷です。山や花、空は言葉を話さないけれど、私が心穏やかでないとき、いつもそばでそっと見守ってくれているような気がしました。私はそんな故郷が大好きです。まだ、故郷を出たことのない私には、星野さんの言う「失つて気づく本当の価値」が分からないけれど、いつかきつと、分かる日が来ると信じています。

私は、星野さんの言葉を読んで、今までの自分の考え方が変わったし、私の中にあった大きなモヤモヤが少し溶けた気がします。

まず、私を支えてくれる周りの人への感謝の気持ちをもつことです。星野さんの言葉で『神様も障害者だからといって特別割引はしてくれない。むしろ難題を吹っかけて楽しんでるように感じる時もある。しかし、私の登れないような坂道はなかつた。』とあります。こういう時、疲れた時は、手を差し伸べ、一緒に歩いてくれる人が必ず現れたといえます。私も、神様はその人に越えられぬ壁などを与えないと思っ

# 空に浮かぶ雲のように、 今という時間は二度と訪れない



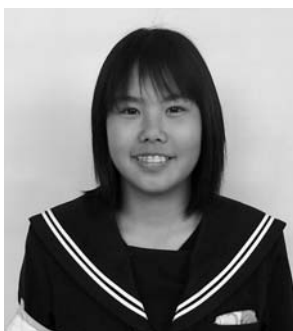
高校生・一般の部 特選  
山下摩耶 (川根高校1年)  
「ことばの雫」



中学生の部 特選  
梶山真琴 (中川根中3年)  
「また、必ず会おう」と誰もが言った。



中学生の部 特選  
小玉泰穂 (中川根中2年)  
「食品の裏側」



中学生の部 特選  
澤口初音 (中川根中2年)  
「ママ、ありがとう」



中学生の部 特選  
藤田優香 (中川根中1年)  
「秘密のスイーツ」



小学生高学年の部 特選  
高畑駿樹 (中央小6年)  
「セブンスタワー 第七の塔」



小学生中学年の部 特選  
松山翔威 (中川根第一小4年)  
「マタギに育てられたクマ 日神山のいのちを守って」